

テーマ：ガンジス河と仏陀像

会社名：金沢工業大学大学院
業種：
役職：専任教授
氏名：明道弘政
住所：東京都港区愛宕
1-3-4 愛宕東洋ビル 12階

初春の早朝、肌寒さを感じる成田空港に到着した、旅の思い出の残る寝不足の体で入国審査を終えて到着ロビーに参加者が集まった。旅の最後となる記念写真を取り、足早に都心に向かう快速電車に乗った。しばらくは窓から見える雲の流れと緑の田園風景を眺めながら旅の想いと無事に戻れたことに感謝する気持ちに満たされていた。

8日前の朝、成田空港の2階出発ロビーに参加者が集合した、初めてお会いする参加者がほとんどで、参加者は12名であった。今回のセミナーをご紹介いただいた、経営者がパスポートを忘れて遅れ、次のフライトで参加される予定とのことであった、しかし、地方から朝2便のフライトで羽田空港に到着して、すぐにタクシーで急げばフライト前に成田空港に到着でき、全員で出発できるように思い、本人に電話を入れた。

今回は、東南アジア赤道直下の島々と美しい海洋を巡るいつもの旅ではなく、インド・ネパール仏陀の足跡を巡る旅である、60代の自分自身の人生を振り返り、今後の生き方を考えるヒントを得られたらと、小さな想いがあったかもしれない。昨年の秋、6年回続している庄内地区の「経営イノベーション研究会」の月例会で、代表幹事にもご就任いただいた、経営者から「仏陀足跡のセミナー」をご紹介いただき、すぐに申し込みをして、今年1月には申し込み手続きを終了した。しかし、運命なのか、翌月96歳になる義理の父が2月に肺の病で病院に入院し、一週間後に亡くなった。生まれて初めて、その2日後に通夜、そして葬儀と喪主の役割を務めさせていただいた。亡くなった義理の父の傍らで、人間の避けることのできない運命とその短さ、そして儚さをしみじみと感じた瞬間である。

旅の最初の目的地は、インドのデリー空港である、

夕方6時半過ぎに到着した、約7時間のフライトであった、日本からは意外と近いと感じた。

翌日は、仏陀が説法を行ったコーサラ国のスタッタとジェータ太子の寄進による「祇園精舎跡(ぎおんしょうじゃ)」と「舎衛城」に向かった、デリー空港からラクナウ空港経由、バルランプールを目指し、長時間の専用バスの旅となった。

聖地の一つである「祇園精舎跡(ぎおんしょうじゃ)」は、平家物語の冒頭にある、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹(しゃらそうじゆ)の花の色、盛者必衰(じょうしゃひつすい)の理をあらはす、驕れる人も久しからず、唯春の夜の夢の如し、猛(たけ)きものも、つひには、滅びぬ、偏に風の前の塵に同じ」(精舎の鐘の音には、この世のすべての現象は絶えず変化していくものだという響きがある、沙羅双樹の花の色は、どんなに勢いが盛んな者も必ず衰えるものであるという道理をあらわしている、世に栄え得意になっている者も、その栄えはずっとは続かず、春の夜の夢のようである、勢い盛んではげしい者も、結局は滅び去り、まるで風に吹き飛ばされる塵と同じようである)で日本人にも良く知られている。夕刻前、バスが祇園精舎跡に到着した、ちょうど夕焼けが薄いオレンジ色から濃い赤紫色に染まり、美しい精舎跡が輝き始めた。



仏陀が説法を行ったところで、全員で「般若心経全文」を合掌した、レンガの硬さと、冷たさが膝と脛に伝わってきた。暫くして寺院の全てに蠟燭が灯され、仏陀が阿難のために祈った阿難菩提樹もライトアップされ感動的であった。

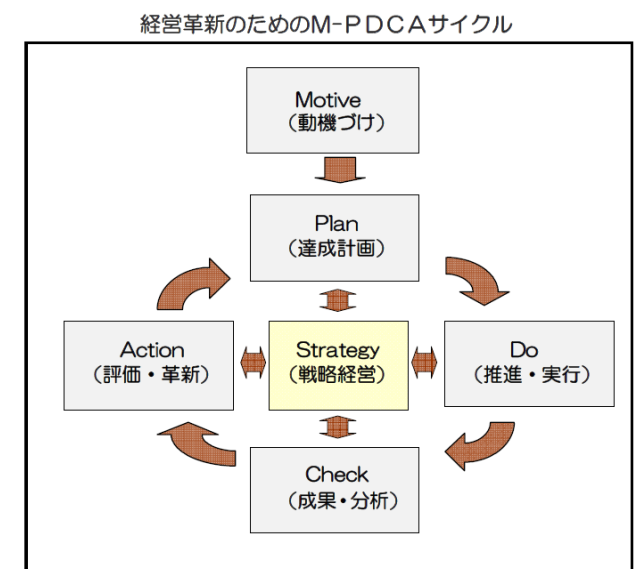
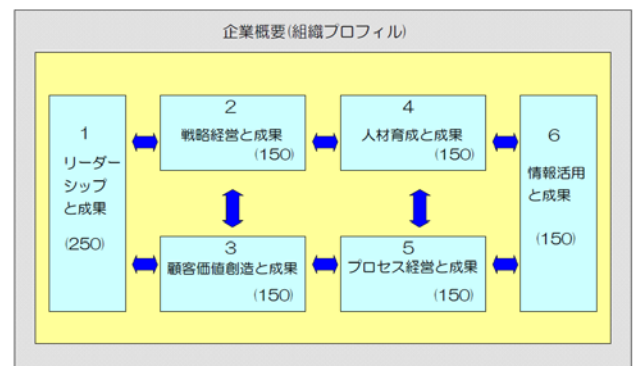
3日目からは、仏陀、生誕の地ネパール（当時ルンビニから入滅の地であるインド（当時クシナガラ））に向かった。

仏陀は紀元前6世紀、シャカ族の王子として誕生、母マーヤは白い象が胎内に入る夢をみて懐妊したという、生まれるとすぐに、7歩、歩いて右手で天を指さし、左手で大地を指さし、「天上天下唯我独尊」と叫んだ。また、29歳で人間の運命である「生・老・病・死」からの解放を目指し、真理を求めて旅に出た、断食による困難な苦行に6年間チャレンジし、やせ細った体で沐浴をした後、牛飼いの親方の娘である「スジャータ」から乳粥を差し出され、それを拒まず食べた、その時、体の各器官が充実し、真理の悟りが得られた。

「悟り」に対し「悪魔ナムチ」がさまざまな煩惱で仏陀を誘惑するが、「心は諸欲に関わることはない、見よ、身心の清らかなる事を」と仏陀が答える、その悟りの「力」として「五力（ごりき）」①信じる力「信」、②不退転の努力「勤（ごん）」、③集中力の継続「念」、④心身の統一「定」、⑤智慧の会得「慧」が確立されたようである。私も前職で39年間の会社勤務中、約20年間営業職を経験した。成果主義の厳しい体制の中で、毎年の期末目標に対して15回以上目標を達成することができた、良く考えると期末の最後の日まで、目標達成を「信じて」「全力で」「諦めることなく」「全身全霊」「考え抜いて」「対応した成果」が認められたものと考えている。「五力」を念頭に営業活動を実践することが、会社への貢献につながるものと考えている。そして、この世の様々な事象を「因によって生ずるものである」と考え「老死」の究極の原因として「順観の十二縁起」（縁条件）が仏陀によって解明された。愚かな欲望の心（無明）によって行（意志の動き）の生起があり、無明を減らすことで行も減があるとして、行の減に至る道として「八正道」を説いた。「正見

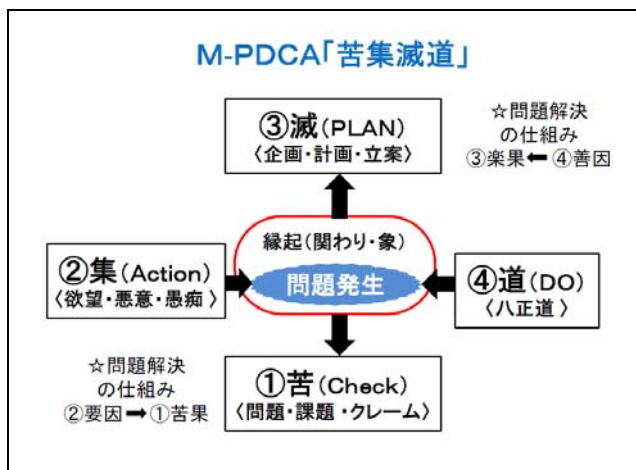
（しょうけん）、正思惟（しょうしゆい）、正語（しょうご）、正業（しょうごう）、正命（しょうみょう）、正精進（しょうしょうじん）、正念（しょうねん）、正定（しょうじょう）」は、悟りに至る修業の基本であり、初めての説法として「初転法輪」と位置付けられている。この「八正道」を、企業の経営者が学び、各企業の特徴と独自能力を考慮して、経営者自身の基本的考え方・生き方として実践できたなら、その後ろ姿を社員が見ることで学び、学習する組織として、企業の持続的成長のビジネスモデルが、構築できるものと考えている。また、仏陀は、大衆に理解できるように分かり易いシステムとして「苦・集・滅・道」を説法している。私が所属する企業の経営変革推進を支援する組織である（財）経営革新審査支援機構（詳細はホームページへ）において2007年度より、米国商務省のMB賞フレームワークを日本の企業に適用できるよう、フレームワークに新規サイクルを追加して活用している。

2014年経営革新アセスメントフレームワーク

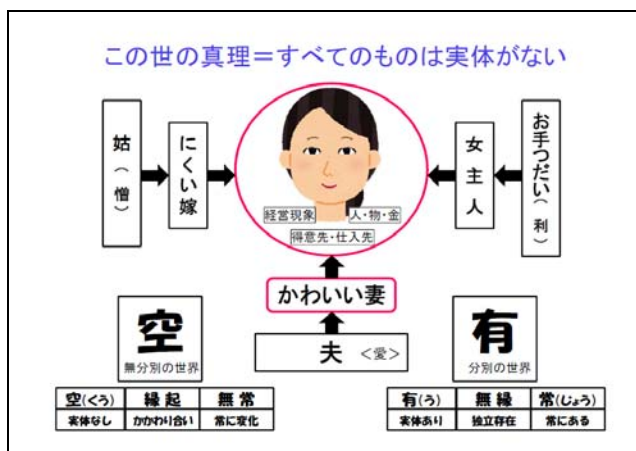


現在、日本の企業では、仕事の効率的仕組みの推進方法の一つとして「Plan-Do-Check-Action」が広く展開されている、当支援機構でも2007年より「Motive-Plan-Do-Check-Action」サイクルとして、社員の一人ひとりが動機づけられて、組織の理念・ビジョン・価値観を実現するために、自由闊達なスパイラル・サイクルの実践が、企業の存在価値および顧客価値創造の仕組みとして重要であると紹介している。今回のセミナー参加を通して得られた「人生とビジネスを豊かに」「この世の本質は実体がない＝空」を見える化の図として作成してみた。

M-PDCA「苦集滅道」



また、この世のすべてのものは実体のない「空」であり、あなたとの関わり合い（見かた）で出現する。



仏陀の入滅は80歳である、クシナガルの沙羅双樹の間に横たわり、弟子に向かって最後の言葉を語った。五月の満月の最初の日の日没直前であった。遺言は「兄弟たちよ、全てのものには限りある命をもっているゆえ、魂の救済を追求するために修業に励んでほしい」と

涅槃堂に仏陀の横たわる姿を、見る事ができた。

今回の旅の特徴として、ほとんど毎日、早朝からドア付きの密閉された部屋のような、冷房効果が高い専用バスの座席に座り、毎日、仏陀の足跡の地に到着する都度、菩提樹の日陰で、松村先生から「インドにおいては、仏陀はあくまでも実在した人間であり、今回セミナーに参加した皆さんも仏陀に近づくために、この旅から学び、今後の人生を歩んでほしい」との説明があり、日々学びが深まっていくことを感じた。

また、旅の感動の一つとして、7日目の早朝インドで最も聖なる河である、ガンジス河でボートに乗り、下流の河岸で布に包まれた死者にたいして、魂の解放のため火葬を行い遺灰も流す場所を見た時である、聞いてはいたが、目の前に迫ると心厳粛な気持ちとなった。ボートから河の中を覗き水質を調べると薄緑色で透明度も良くない。この後、ガンジス河の沐浴となるが、少し気が滅入ってきた、日本では研究会、講演会等の出張先で掛け流しの温泉に入ることを楽しみとしている私にはパンツ1枚の沐浴に迷いも出ていた。暫くして、ほぼ全員が沐浴をするとのことで、一緒に河岸に下り、少しぬめった石段から河に入った。鼻をつまんで5回ほど頭まで河に浸かった。思った程、透明度も悪くなく、水もきれいに感じた、しばらくして、慣れたところで平泳ぎをした。心地よかった、上がると肌がツルツルするのが分かった、温泉とは異なる清々しさを感じた。帰りに今回、希望していた菩提樹の仏陀像を購入した。

